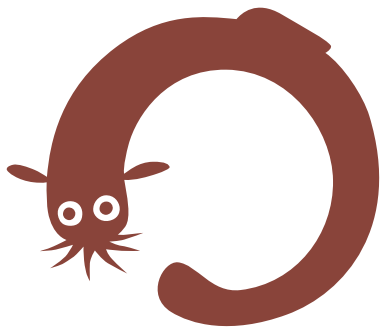


そうかわせみ、



そ
う
か
わ
せ
み、

Vol.4



伊藤浩子
夜空泥棒 2
観覧車 4



相沢正一郎
宗伯の手紙 6



岡島弘子
肺のある風景 10



一色真理
終バス 12
帰宅 13

あとがき 14

夜空泥棒

のびてゆく暗がりと
夜光灯に
あごとのどがむずがゆい

花卉をすりつぶして
すりつぶしてしまいたいから
体節のリピートに
ぼんやりしているのです

いいのがれは
(くす)

蛹にも似て
もうじき風もやってくるし
やがて消えてしまうのですね

ふさがらないのは
淡い明け方の底のほう
卵生ときはためらいがちに
ひとみを伏せて

(たったひとつの)
約束した
その響きをいまも
追いかけている

欲しいのはからだだからです
すぎとおった翅の重なり
したしい機能のおおきさで
ひとつの季節を

てのひらにほどこうと

向かい合って座った男の左足のすぐそばに、見たこともない虫がいて、もぞもぞあしを動かしている。大人の人差し指くらい大きく、黒い背中に赤い線が二本、まっすぐ縦に入っている。触角がとても長い。まったくもう、何だつてこんなところにあんな虫がいるのよ。

遠ざかる下界に、女はふと妊娠のことを思う。いつかわたしはこの男の子どもを産むのだと、そう思うだけで下半身に鈍い痛みが走る。女は大きく膨らんだ自分の身体を想像する。その中にいる胎児のことを思い描く。

でも胎児はふつうの胎児なんかじゃない。それはあの虫なのだ。羊水にぶつかりと浮かんで楽しそうにあしをバタつかせている姿が、女の脳裏にはつきり浮かぶ。それは日に日に大きくなって、女の身体を内側から圧迫する。女は胎児の昆虫に支配されている。自由意志ではどこかに移動することもできない。胎児の昆虫？ でも、一体どうして？

きみさ、あのとき、すごく声をあげるだろ？
男が女の存在をやつと思いついたかのように話しかける。

あのときだよ、ほら、あのさいちゅう、大声で叫ぶだろ、いまそのことをずっと考えていたんだ、きみの声とか顔とか、あれのたびに、なんか変なものを犯している気分になるんだ。そのこと、知ってた？

女は首を振る。変なものを犯す？

見たこともないような虫を犯している気分になる、きみのあそこを見るたびにそういう気になるんだ。きみが何て言おうと、ぴくついて、ひいひい言っただぜ、そのことは知ってた？

それから何かを口に含む、その含み方がものすごく下品だ。ああいうのを見ると、今度はこちらが犯されている気分になる。ものすごく下品で、貪欲。きみにフェラチオさせないのはそのせいだ。ぶよぶよに膨らんだ舌、ふやけたきみの親父にお似合いだぜ。

虫は匂いを発し始めている。しばらくすると男の足元から飛びあがり、わき腹に移動する。男はまったく気づいていない。

いや、ちがう、本当はとつくに気づいているのだ、言わないだけだ。虫は、ただの虫ではない、男のなにか、なのだから。

男はひつきりなしにしゃべり続けている。このまま女がどうにかなってしまふまでしゃべり続けるのだろう。虫はますます嫌な匂いを発して、男の上半身をよじのぼり始める。

観覧車がちょうど天辺で、停止する。

宗伯の手紙

「父上さま、天保六年（一八三五）五月八日の五ツ時（午前八時頃）、わたしはあなたに年来の恩を感謝して息をひきとりました。七ツ時、わたしと同門の画友、渡辺華山が来宅。それから、華山は枯相を写し、三年後にわたしの肖像画を描き終えました。三十八歳——皮を纏った骸骨、それがわたし。それでも、華山の名声と、その名を辱めないみごとな筆さばきの肖像画として、わたし、宗伯はいまでも生きつづけています」

夜中に、テーブルの上のノート・パソコンに向かっていると、画面の下のちいさな丸い緑色の光が瞬いて、消えた。なんども、スイッチを押してみましたが、ひらきません。わたしの中で消えかかった蛍光灯のような苛立ちがつづく。

だいぶ使いこんだ古い型のパソコンで、もう十分に働いてもらったんだから……そう呟いてみても、ながいあいだフロッピーに保存することをしなかったから、内心「こまった」とおもっている。

数日後、未練がましくパソコンを取り出し、試しにスイッチを押す。すると、緑色の目がよわよわしく光っている。……息を吹き返した。「それっ」とばかりに、たくさんのことばをフロッピーに——岩に打ちあがつて今にも沈みそうな難破船から、あわてて積荷を運び出すようにして。

宗伯の父、「滝沢馬琴」の資料を読みあさり、もうすでに創作ノート三冊にまとめてあって、やはり紙に書

かれたことばは、安心。——そろそろまた書きはじめよう。

はじめに『宗伯の手紙』を書いてみよう、とおもったのは、息子の本棚から子ども向けの『南総里見八犬伝』をみつつけ、ばらばらページをめくってから。……懐かしい。ついでに滝沢馬琴についても調べてみますと、たいていの本には、馬琴より三つ年上の妻・お百のことを「すが目で容貌も醜く、無学で愚痴っぽい。よく癩癩をおこし、一家に風波をまきおこした」と書かれています。

お百は、飯田町中坂下の下駄屋の家付き娘。もし、妻の言い分があるとしたら——馬琴は、「ひとが足に履く品物をあきなう」商売を卑下しているけれど、そのおかげで生活の安定が得られ、著述に没頭することができた。また、若ざかりの頑健なからだにとつて肉欲の処理ができる、そんな打算から入婿になったわけです。息子の嫁のお路が、夜中に腹痛をおこした馬琴の廁通いの爛をとつた孝行話や、馬琴が失明したとき秘書役になり口述筆記をして『南総里見八犬伝』を完成させたという美談なども、とうぜん妻の目からは違って映ります。馬琴の倅・宗伯が子どものとき、『夏日祖はだぬがず、衣を解かず、冬日妒はたけによらず、臥して物語せず』と、馬琴がしるしているように、いわゆる「良い子」。馬琴の厳しい躰と、武士であったことのプライドから、近所の子どもたちとは遊ばせなかった。年頃になっても遊里に遊ばず、劇場へも足を入れなかった。馬琴が若いころの、いわゆる放浪時代に重病（梅毒）にかかった経験から、また自分が志して果たせなかつた医者の道を息子に託すが、宗伯は生まれつき虚弱——脚気・眼疾・歯痛・頭痛・水瀉・咳嗽に生涯なやまされました。それじゃあ、「ひとの脈をとるところではなく、しょっちゅう癩をおこしていた」宗伯の言い分は……。

わたしの息子は、『八犬伝』の中で印象に残ったのは「化け猫の話」だといいます——十四、五歳の子が、庚申山のいただき近くの岩穴をくぐる（胎内くぐり）の通過儀礼の途中、なにもものかに喰い殺された。つぎの

年も、おなじことがおきた。子どもたちばかりではない。旅人も、きこりも、けものたちも惨殺された。「子どもたちが、一人前のおとなになれないのは、まことに気の毒。みどもが、怪猫を退治してやろう」と、赤岩一角が、みながとめるのもきかず、出かけた。三日後、帰ってきた一角の目がひかっている。そして、かつてかわいがっていた角太郎というひとり息子につらくあたりはじめた……。

この話を讀んだとき、息子は——街中のひとが宇宙人に乗っ取られたアメリカのSF小説を思い浮かべた、という。じゃあ、お父さんは……。

坪内逍遙が『小説真髓』で、『道徳の権化、観念のお化け』と『南総里見八犬伝』をあげつらっています。たしかに原文で読むと、粘着質の馬琴が執拗に描きこんだ《衛学的な筆致》はとても退屈だけど、わたしが子どものころに讀んだ『八犬伝』では、そこがきれいに洗ひ流されていて、ただただ冒険活劇にわくわく。しかし、児童向けの検閲からさえ滲み出た——見世物小屋の毒々しい絵看板のような、血と闇と隠微な性と残酷美はたしかに感じられました。

もうずいぶん前に讀んだ『八犬伝』ですが、いまでもいくつかの情景をおぼえています。——洞窟の中で、獸欲に燃える犬の八房の愛を護身刀で拒絶する伏姫だが、水に映った自分の顔が犬に、といった場面とか、毒婦・船虫が春をひさぎつつ旅びとの舌を噛み切る、といった場面とか、その船虫を、正義の犬士たち六名が杉の木に縛り付け牛に突かせ、なぶり殺す。

滝沢馬琴（倉蔵）は、一七六七年に江戸深川（松平信成の屋敷内）に生まれます。父・興義は、松平家を切り盛りする功臣——事務の才のほか武芸にもすぐれていた。まるまると太った犬をかわいがっていたが、猫はひどく嫌がっていた。酒が好きで、客があるとまっかな顔をほころばせて盃を手にかけている。

その剛腹な父も、馬琴が九つするとき、とつぜん病に倒れ、耳聾いっぱいの吐血、苦悶。馬琴は、父の死を目撃。滝沢一家は悲境に陥る。馬琴は、松平家の幼君の相手を選ばれたが、障子に《木がらしに思いたちたり神の供》の句を書いて、累代の主家を飛び出す——馬琴、十四歳の冬のことです。

わたしは、馬琴が小説家になるまでの半生に悪を培ってきた、とおもいます。そして、滝沢家の主になった途端、坪内逍遙のいう《勸善懲惡なる、近代人の目から見れば単純極まりない原理》が、作品の外にも働く。馬琴は、宗伯の半面——馬琴自身の半生を抑圧し、息子の生命力を奪った、そんな風におもえます。

神田明神下の住まいに、ちいさな庭園があり、樹木や草花、野菜や薬草が植えられていた。瓢箪のかたちの細長い池が掘られていた。からだのよわかった宗伯は、保養のためによく釣りに出かけ、獲物をこの池に放した。宗伯は、草の匂いにしゃがみ込んで、水の中で背をひかせて泳ぎまわる魚を見て楽しんでいたんでしよう。

その池を、馬琴は埋めてしまう。『後の為の記』には、『後に小児の愆て害あらん事を怖るゝが為なり』とあります。そのほかにも宗伯の健康に障りがある、と『風水方位の書』で知ったためです。池をすっかり埋めてしまっても、息子の病氣は快方に向かいませんでした。

さて、『宗伯の手紙』ですが……。

ある朝のこと——蛇口をひねって、洗面所に水をためる。てのひらの水鏡に、犬の顔……ということはありませんが、水に揺れるわたしの顔のむこうに、父の顔。そして、息子の顔——そういえば普段、子どものちよつとした仕草や顔つき、ものの言い方に自分の面影があらわれてぞつとしたことがあります。

そのとき、滝沢宗伯にもうこれ以上しゃべらせるのはやめよう、と思いました。いいえ、私を見る息子の眼の光が赤くよわよわしく点滅しているのに気づいたからです。

肺のある風景

肺は蝶のように
両翼をゆらめかせ
さんそ 炭酸ガスをおさえて浮いて
ふわり飛ぶ
野川の兩岸を翅にかえ
さらに いのちを ふくらませようとする

肺は

ひろげた本の頁にもみえる
言葉が うら おもてと
ぎっしり詰めこまれている
左下肺野からうすれてきて
どうしても 読みとれない
そこから

まわりに空白がひろがってしまう

肺は

成層圏にまでのぼりつめる
うすい空気にくいこむ
にげるのを追って
さんそを吸う できれば未来のさんそを
すいこむ すいこむ

肺は

ついに炎症をひきおこす
真夏をひきよせる炎症
猛暑をもたらす炎症
夏はさらに燃え
炎症はひろがり

夢の中に発火する

終バス

ターミナルでバスを待っている。そのバスに乗れば十時までにあなたの家に着けるはずだ。だが、ぼくはどうかやうやら発車案内を聞きもらしたらしい。待合室から駆けつけてみたが、乗りたかったバスの姿はない。

茫然と立ちつくすぼくの前を、いろいろなところに向かうバスが発車していく。最後に、ぼくの名前を行先表示にしたバスがやってきた。このバスは一番遠くまで行くらしい。

帰宅

ぼくの家の住居表示が僅かに変更されたらしい。今日届いたハガキの宛先が最後の数字だけ違っている。ぼくの名前も変わったのだろう。昨日は漢字だけの宛名だったのに、平仮名が混じるようになった。

先週末までは黒い犬の寝ている家の四つ角を右に曲がつて帰宅した。ところが今は信号機で左に折れ、奥から三軒目がぼくの家だ。ドアを開けると、「おかえり！」という声が出て、ぼくを迎えてくれる。

何も変わってはいない。ぼくは自分に言い聞かせる。今は真夏で、部屋の中には少しだけ雪が積もっている。台所では血みどろのスープ鍋が煮えていて、その中から笑いかけるあなたの首に片目をつぶり、ぼくは「ただいま！」と返事をす。

八月十四日の夕方、崖線から野川へと降りる坂道にさしかかると、前方の蔦でびっしりとおおわれた斜面を、一人の男が歩いていくのが黒いシルエットになって見えた。両肩をほとんど揺らさない滑るような歩行のしかたに見覚えがある。ぼくが生涯で唯一「先生」と呼んでいた男だ。もうこの時をおいて二度と出会うことはないだろう。「先生！」と呼びかけたが、振り向こうともしない。無言のままどんどん先へ行ってしまう。ぼくは足元の手ごろな石をつかむと、思いきりその背中へと投げつけた。ぶつかれ！だが、石は男の頭をかすめて、空の向こうへと吸い込まれていく。バチッ！どこかで何か張りつめたものが壊れる音がした。地面にちようど落ちようとしていた夕陽を、ぼくの礫は直撃してしまつたらしい。一瞬世界は一面の闇になり、ぼくは男の姿を永遠に見失っていた。

(一色)

近ごろの地球の活動は一段と凄い。今年の三月十一日には東日本大震災が起こって、想像を絶する被害が出た。東京は揺れが長く強く、私が寝ていた場所に本棚から本がバタバタ落ちてきてたちまち床を覆い尽くした。揺れている間は身動きできなかつたが、地球がひといきついているあいだに、私たちは復興につとめる。夏の猛暑も酷かつた。八月の十七日ころ前線が南下し東京も雨と北風にめぐまれた。この隙をみてさつそく体力の回復をはかることにする。人間は地球のご機嫌をみながら生きていくしかないと思いついた。なにしろ地球は人間が住めるようになるまでにすごいドラマを繰り返してきたのだから。それにしても近ごろ私のテリトリーが狭まった気がする。靴は壊れるし髪の毛もなじまなくなってきたし服も合わなくなつたし深呼吸すると肺も痛い。地球から放り出される日も近いのかも。

(岡島)

真つ暗闇の中で、一体どんなふう存在を確かめればいいんだろう？言葉で？身体で？生まれてからずっと試してきたけれど、これこそが求めてきたものだとなんか納得したことが一度もない、それは、もう、たぶん宿命さながら。

俺は手を伸ばし女の顔をやつと探し当てる。小さな顎、まつすぐ伸びた鼻梁、その間に、ひんやりと尖つた底なし沼のような更なる暗がりがある。『俺はまず自分の唇を彼女の上唇に、それからその尖つた口の下の方に持っていき、それからもろに女にキスした。俺の口が女の開いた口に重なつて、俺たちは口のなかで出会つた。』

それはそこにあつた。本当に。廊下を歩く長い道のり。開くドア。美しい見知らぬ他人。裂けた月が元通りになる。俺たちの指が涙を振り払う。それはそこにあつたのだ。(デニス・ジョンソン)

『ジーザス・サン』より)

(伊藤)

一八三六年に馬琴のひとり息子——宗伯が死去しています。その翌年、馬琴は四谷信濃町仲殿町の屋敷に移りました。四十年前に建てられた古い屋敷で、母屋の床が落ち、壁も破れ、柱も朽ちている。馬琴は、改築工事のためにかかった費用などを事細かく日記に書きます。土蔵のうしろに物置を建てさせ、仮住まい。寒風にさらされながら裏の竹藪に穴を掘り用を足す——といったことまで。

以前、職場がJR信濃町駅の近くにあつたため、私は毎日のように馬琴の四谷宅のすぐそばに通っていました。会社を辞めてから、ずっと後になつて『八犬伝』最終回の「回外剩筆」——歌川国貞が描いた馬琴と頭陀の絵の背景になつている部屋が近くにあつたことを知りました。いま、私の記憶にあるのは、「首都高速四号新宿線」をひっきりなしに流れる車の潮騒だけ。

(相沢)

同人住所

相沢正一郎 / 〒189-0024 東京都東村山市富士見町3-17-24

一色真理 / 〒201-0002 東京都狛江市東野川3-17-2-302

伊藤浩子 / 〒403-0016 山梨県富士吉田市松山3-4-222-201 宮下方

岡島弘子 / 〒201-0002 東京都狛江市東野川3-17-2-302

そうかわせみ、Vol.4 2011年9月26日発行

頒価500円

編集：相沢正一郎

発行：そうかわせみ、の会 〒201-0002 東京都狛江市東野川3-17-2-302 一色方

印刷：遠藤印刷 〒102-0072 東京都千代田区飯田橋1-6-9

表紙：相沢育男
